

# 20世紀人文学の方法論的再検討のための試論

— 歴史家黒羽清隆をてがかりとして<sup>①</sup> —

山本和重 東海大学文明研究所所長

〔報告〕

## はじめに

本年〔2016年〕4月に、新たに総合社会科学研究所が設置され、文明研究所は、人文学を中心に研究活動を推進することになった。しかし近年、人文学に対する社会的な評価は急速に低下しつつあり、人文学の活性化をどう進めるのかが、課題となっている。そうした観点から、本研究所では昨年度から平野葉一教授をリーダーとするコア・プロジェクト「超領域人文学 (Trans-Disciplinary Humanities) 構築に向けた基礎研究」を展開しているが、今年度からさらに、「20世紀人文学の方法論的再検討」の共同研究をスタートさせた。今回は、その第1回研究会ということで、プロジェクトリーダーから、今後継承すべきと考える人文学の方法論について、歴史学に即して試論的な形で提示したい。

本年5月に、近代イギリス史が専門の長谷川貴彦による『現代歴史学への展望 言語論的転回を超えて』が出版された。「現代歴史学への展望」というタイトルは大変魅力的であり、歴史学の今後の方向性を議論する上で参考になる。

長谷川は、日本と同様にマルクス主義の影響が大きかったイギリスの社会史研究の動向を参照しつつ、20世紀半ば以降の歴史学研究の動向を、戦後歴史学→社会史研究→言語論的転回→「転回」後、として把握している。それは、はしがきの「社会史から言語論的転回、そしてポスト言語論的転回へ」といたる歴史研究の推移 (p.vii) といった表現からも確認できる。社会史研究以後の研究動向を分節化して提示したものといえよう。そして、「言語論、文化論、空間論的な諸「転回」を経た世代の歴史実践を現代歴史学と規定」(p.204) している。「現代」はかなり限定的であり、「社会史にかわる「現代歴史学」」(p.157) という表現に示されるように、社会史研究は現代歴史学に含まれていない。

こうした理解は、フランス社会史研究の動向を紹介される

とともに、現代歴史学の在り方について積極的に発言をされた二宮宏之の見解とは異なっている。二宮の場合、下記のように、現代歴史学を「近代知の再審」を経たあとの歴史学の動向とし、「社会史」は、その現代歴史学を切り開く試みとして把握していた。

以上に検討したような歴史の捉え方の転換は、日本のみでなく、ヨーロッパでもアメリカでも、ほとんど同時代的に顕在化した。その呼び名は一樣ではなかったし、それらが乗り越えようとした先行歴史学のありようも同じではなかったが、そこには共通する特徴を見出すことができる。(略) その根底にあるのは、普遍主義的科学の装いをもって理論武装した近代知そのものの再審であり、近代の学問から現代の学問への転位なのであった。その意味で戦後歴史学〔大塚久雄、石母田正、高橋幸八郎〕が近代歴史学の最高の達成であったとすれば、社会史は現代歴史学の道をひらく第一歩となることを自らの課題としたのだ。(二宮「戦後歴史学と社会史」、傍線や〔〕は引用者、以下同じ)。<sup>(2)</sup>

本稿もまた、「現代歴史学」の「現代」を長期的なスパンで、近代知から現代知への転位という枠組みで把握しようというものであり、日本史研究の分野から近代知から現代知への「転位」を、日本近代史家黒羽清隆 (1934-1987) の研究を手がかりに提示しようというものである。黒羽は、その研究実績の豊かさに比して、十分評価されているとはいえないが、1970年代に近代日本の軍隊や戦争の社会史的研究をほぼ「孤立」しつつ探求した研究者であり、また歴史教育者としても多くの著作がある。

## 1. 日本における社会史研究の文脈<sup>①</sup> — 国民的歴史学運動との関連 —

### ① 社会史研究と網野善彦

黒羽清隆の研究にふれる前に、日本における社会史研究の文脈についての本報告の理解を提示しておきたい。そして、そのことが黒羽を取り上げることの説明にもなる。

日本において、1970年代に社会史研究がブームとなった。それは、西洋史では阿部謹也（『ハーメルンの笛吹き男：伝説とその世界』1974年、『中世を旅する人』1978年、『刑史の社会史』1978年）に、日本史では網野善彦（『蒙古襲来』1974年、『無縁・公界・楽一日本中世の自由と平和』1978年）に代表された。そして社会史研究の世界的な潮流について、雑誌『思想』1976年12月号は、ジャック・ルゴフの「歴史学と民族学の現在—歴史学はどこに行くか」を、アナール学派について解説した二宮宏之の「解題」とともに掲載し、さらに1979年9月号で、「社会史」の特集を行った。そこでは社会史は、基本的には西欧における新たな研究潮流として把握されている。

しかし、当事者の一人とされた網野善彦は後年、「のちにアナール派との共通性とか、社会史とかといわれることに、私は非常に困りました。まったく事実と反しているからです。」「私は、自分から「社会史」を主張したことはないのです。阿部謹也さんが強調されたことは事実で、阿部さんと対談したのでそう思われたのだと思います。日本で社会史がブームになったのは、かなりの程度つくられたイメージだったという感じがいまだにしています。」と違和感を表明している（網野「人類史的転換期における歴史学と日本」）。

網野について言えば、神奈川大学常民文化研究所で網野と行動をともにした研究者である泉雅弘が「私は「網野史学とは何か」と問われたならば、たった一人による、一種の、あるいは本物の「国民的歴史学運動」であったのではないかと答えない。」（『神奈川大学評論』53号、2006年）と指摘している。国民的歴史学運動とは、日本古代・中世史家である石母田正（1912～1986）が1948年に「村の歴史、工場の歴史」（『歴史評論』1948年1月）で「国民のための歴史学」を提唱したことに由来し、1950年代に多くの研究者、学生を巻き込んで展開した運動である。その提言を含む『歴史と民族の発見』は多くの人々に深い影響を与えた。哲学者の鶴見俊輔は、網野との対談で、国民的歴史学運動と網野の仕事とのつながりについて、次のように指摘している。

厚生省の女子職員がつくった長い長い壁画のようなもの（略）石母田正の影響だと思いました。ああ、こういう歴史のとらえ方があるのかとびっくりした記憶があるんですよ。（略）石母田正の『歴史と民族の発見』からそこに来るひとつの流れですね。それには心を動かされました。

こういうつながりは、網野さんの現在の仕事の中にありますね。私はそれを感じます。（網野善彦・鶴見俊輔『歴史の話』1993年。対談は1992年3月）

網野も、小熊英二との対談で、国民的歴史学運動でなされた、「歴史家は学界に向けてものを書き、発言するのではなく、国民の一人として国民の問題を自らの問題として取り上げて、国民に向かって発言すべきだ」という主張については、「その後の自分自身の生き方に照らしても、私はいまでも異論はありません。」と述べている。ここから、日本における社会史研究と、1950年代の国民的歴史学運動との連関が推定される。

## ②国民的歴史学運動と網野善彦

まず、国民的歴史学運動について簡単に説明しておこう。前述のように国民的歴史学運動は、日本古代・中世史家である石母田正が1948年に「村の歴史、工場の歴史」で「国民のための歴史学」を提唱したことに由来する。石母田の提言は『歴史と民族の発見』（1952年3月）としてまとめられるが、そこでは学風の改革や、民衆の生活と要求に根ざした新しい学問の内容と役割の模索する「国民的学問運動」が提唱されていた。民衆の日常生活や伝統を重視し、方法としては民話や伝承の活用、聞き取り調査などが謳われていた。また既存の歴史学で軽視されていた女性や、朝鮮人への関心も記されている。『歴史と民族の発見』は、当時の歴史学徒にとって、バイブルのような存在だったという。そして『歴史評論』（1952年11月）で、民科・歴史部会による「村の歴史・工場の歴史を創ろう」が提唱され、歴史研究者と工場のサークル活動との交流や、「民話の会」「民族芸術を創る会」など芸術家との交流が進められた。

石母田や民科・歴史部会の提言は、学生に大きな影響を与え、多くの学生が歴史を学ぶ職場サークルに加わり、講師などを務めた。こうした運動は、京都民科歴史部会の「祇園祭」、東大教養学部学生の「山城国一揆」などの成果を生み、またそれまで歴史学では閑却されていた歌謡や民話などの文化の領域に視野がひろがった。こうした動向は、当時の日本共産党の政治路線とも密接に関係していた。戦後の日本共産党は、占領下での平和的革命路線をとっていたが、1950年1月のコミンフォルムによる、占領下での平和的革命は不可能とする日本共産党批判を受け入れ、民族独立を課題と

する。それに対応して国民的歴史学運動における日本民衆の伝統の掘り起こしは、日本民族や日本文化の一体性を強調する傾向が顕著になり、さらに1951年5月に日本共産党が朝鮮戦争下の日本が革命情勢にあるという認識から、中国共産党流の農村が都市を包囲するという武装闘争戦術を方針して採択したことで、国民的歴史学運動では山村工作隊のための紙芝居の製作など、学問研究から離れた方向に進む。研究者の運動からの離脱などにより、運動は閉塞状況になり、そして1955年7月の共産党の六全協後の路線転換で、国民的歴史学運動は終焉する。

国民的歴史学運動を提唱した石母田自身が、国民的歴史学運動を観念主義、精神主義として自己批判し、実証主義を歴史学の唯物論であるとして、かつて厳しく批判していた実証主義歴史学との提携を主張<sup>(3)</sup>して以後、歴史研究は実証主義の方向へと転回する。この結果、歴史学界において、国民的歴史学運動は性急な政治主義として、「封印された記憶」となる。

網野は、1950年に東京大学を卒業し、日本常民文化研究所の所員となり、国民的歴史学運動では学生等を指導する「督戦隊」の立場にあったものの、1953年夏頃に運動から「脱落」した。網野は1978年の著書で、国民的歴史学運動と自身との関わりについて、「一九四九年から五三年前半にかけて、私が犯した誤りとその社会的責任は、もとより「未熟」などという弁解の余地のないものであり、この書をふくめ、五三年後半以降の私の仕事は、すべて、この消し難い自己の責任を、たとえすこしなりとも償いたいという気持ちからでたものであることをあらためてここで表明しておきたい。」（『中世東寺と東寺領荘園』1978年）と、国民的歴史学運動で自身が果たした役割について、厳しく自己批判をしている。しかし、やはり、国民的歴史学運動に関わった経験を有するフランス近代史家の喜安朗は、当時の網野の動向に関する「網野善彦年譜」の記述について、「党员歴史家からみた運動の先端部分、今から言えば運動の表層部分にすぎないのである」と指摘し、つぎのように述べている。

しかし国民的歴史学運動はこうした表層の下に、みずからの将来の生活と人生の指針を独自に探り出そうとする職場や地域の日常の人びとの姿が、一つの深い層として存在していたのである。それは再び世界戦争の危機に人びとを直面させた、朝鮮戦争下のことであった。あ

れほどまでに深く多くの人びとが、真剣にどう生きればよいのかを考えた時代は、戦後の社会になかったのではないかと思われるほどである。歴史を学ぶ職場サークルの運動はこの深い層に接していた。網野との対談『歴史の話』で鶴見が述べている厚生省の職員によって創られた「母の歴史」はその層において生まれた営為であった。このような層にかかわって出ていた問題を抜きにしては、国民的歴史学運動の深層を理解することはできないと思うのだが、それは今まで語られることが少なかったものなのだ。（「網野善彦における絶対自由の精神 境界領域を踏破する歴史学」）

前述のように鶴見が同時代に「心を動かされ」、喜安が「国民的歴史学運動の深層」として回想する厚生省女子職員の「母の歴史」。その作成に関わったのが、本報告がとりあげる、当時、東京教育大の学生だった黒羽清隆である。

### ③「母の歴史」と黒羽清隆の軍隊社会史研究

1954年7月の『歴史評論』第57号で「特集 母の歴史」が生まれ、そこに厚生省木曜会・教育大歴史学研究会の「母の歴史、をつくる中で」が掲載された。以下、これにより、「母の歴史」作成の経緯などを記す。

「木曜会は木曜の昼休みを利用して、日本の歴史を皆んな勉強する、ささやかなサークルの一つ」である。（後年の黒羽の回想〈「日記・伝記から読む日本近代史」〉によると、木曜会のメンバーは、厚生省の大臣官房に所属する統計調査部の事務労働者で、ほとんどが女性であった。）そのサークルで、教育大の学生が指導して歴史の勉強会を開いていた。木曜会で、文化祭にむけて何をするかについての話し合いのなかで、職員から自分たちで何かつくることが提案され、それに対して教育大生が「母の歴史」を提案し、メンバーはこの提案にとびついた。そして母親へのアンケートをもとに「母の歴史」をつくることとなった。

そして、そのアンケートにかかれた様々のお母さんと様々のお母さんの生活をもとにして、誰々という特殊な母でなく、日本の母ともいべき誰の母にも共通する、しかも、個性をもった母「おとよ」を作りました。

更に「おとよ」の生れたという一九〇〇年（明治三十三年）前後から現在に至るまでの日本の政治、社会、国民生活等の状態を詳しく調べ、その上で日本の母「お

とよ」さんがどの様な苦しい生活をどの様に生き貫いて来たかというストーリーを作りました。

「おとよ」の人生のストーリーを、30余枚の絵を中心に、30メートルの絵巻物に仕上げ、文化祭会場である虎の門共済会館に展示した。これが高く評価されて全国に紹介され、各地を巡回することになった。

「日本の歴史」を勉強していた厚生省木曜会が、「母の歴史」を作成することになった背景には、女性であるメンバーの、職場や家庭においておかれていた状態と要求に加えて、既存の歴史学に対する批判的な認識があった。

だが、まだまだ私達の歴史の話は、職場の人達の、要求を満たすことが出来ないでいる。私達の、話す歴史は、何かまだ職場の人達の、生活とかけはなれている。(略) いくら今までの歴史学の成果を砕いて、やさしく話しても一向解決されない。それは、今までの歴史の内容そのものに、大きな欠点がある様に思われる。職場の人達は、私達に新しい歴史の話を求めて来ているのである。

こんな時に、私達の木曜会は文化祭を迎え、「母の歴史」を作ろうということが提案された。職場の人達にとっては、「母の歴史」の中にこそ、木曜会に求めて得ることが出来なかった、新しい歴史がある様に思われた。今までの社会の構造論とか、範疇論、或いは階級闘争讃美一点張りの歴史の話でなく、ほんとうに、働く人達の生活を支え、戦いの武器になる様な歴史が、「母の歴史」の中にある様に、考えられたのである。

「母の歴史」は、社会構成史や階級闘争史とは異なる、「新しい歴史」の模索のなかでつくられたものであった。

黒羽自身は、1981年の講演において、『歴史と民族の発見』という石母田正さんの本は、当時の私たちにとってバイブルに近い役割を果たしました。」と回想するとともに、厚生省の事務労働者のサークルと母の歴史作りをした経験をふりかえり、「こういうことがこれから私がお話すること、あるいは私が現在、日本の近現代史をやっていること、その私の日本近現代史の考え方の中に、おそらくスズメ百までであり、三つ子の魂であって、原点という形で生きているのではないかなと思います。」と述べている。(黒羽「日記・伝記から読む日本近代史」)

黒羽は、1956年に東京教育大学を卒業後、中学校教諭・高等学校教諭として教鞭をとり、社会科教員として日本史教

育に携わるとともに、15年戦争期における軍隊や戦争についての専門家として研究論文を発表する。後者の成果が、1979年に三省堂から刊行された『十五年戦争史序説』である。

この著作の日本近代史研究における独自性については、指導教員であった家永三郎による、巻頭の「序」に適確に記されている。家永はそのなかで本書の特徴の1つとして、史料の選び方をあげ、未公表の新史料の発掘などよりも、戦争中の和歌や軍医の戦陣医療活動記録の活用など、「探し出せば自由に読める文献などを、新しい視点から見直したり、鋭い分析を加えたりすることによって、それらの文献を読んでいたはずの読者たちが予想しなかったにちがいない歴史的展望をくりひろげて見せる。」と指摘している。黒羽は本書所収の書評のなかで、「従軍看護婦とか宣撫官とか軍医とか慰安婦とか工兵・輜重兵とか、要するに庶民レベルの雑書資料をもっと生かすべきではないのか。」と課題を提示し、本書中の「十五年戦争における戦死の諸相—「統計」と「歌」と—」では、「死に方の美学」に対置されるべきものとしての「死に方の実学」という視点から、戦死の統計、軍医の報告書、戦争吟を取り上げ、戦死の様相を論じている。また「国民意識における日中戦争—戦争記・戦争吟を中心として—」では、日中戦争期に兵士によって大量によまれた「戦争吟」の分析から、兵士の歌には「中国民衆ないし中国兵士へのシンパシイと憎悪とがうたわれ」、国内でよまれたものとは対照的に、「いわゆる「チャンコロ」意識としての侮蔑は(略)ほとんど無縁」であることを明らかにしている。

黒羽は冒頭の「方法的序説」において、「十五年戦争史への内<sup>・</sup>在<sup>・</sup>的<sup>・</sup>批<sup>・</sup>判<sup>・</sup>という視座に固執した点において、いくらかは先学諸家の十五年戦争史論と異なっている。」とし、「内在的批判とは、ここでは、あの苛烈な戦争期を同時代人として生きた人びとの、その当時における認識あるいは生の志向性または意識の「森」に分けいり、その「森」のなかでの彷徨をできるかぎり追体験しつつ、十五年戦争史への歴史的批判をはたそうとする試みをいう。」と述べている。戦争の実態を民衆の経験・意識に即して解明していくことを課題としており、国民的歴史学運動との連関をみることができる。また黒羽が、「私は、ここにおさめた論考群を通じて、民衆の社会史的な生態と意識との追求あるいは描出に、相対的なウェイトをかけてみた。」と記しているように、その研究は社会史研究の範疇に含まれるものである。

日本近現代の軍事史研究において、慰霊、軍事救護、軍事郵便といった課題が浮上し、社会史的な観点からの研究が進展するのは、主に1990年代以後であるが、黒羽は1970年代に先行して、軍隊・戦争についての社会史的研究を展開していたのであり、その黒羽の方法論が、1950年代の国民的歴史学運動に由来することは、間違いなからう。黒羽の研究に着目していれば、網野の仕事とあわせて、社会史をフランス社会史の影響という視点だけでなく、国民的歴史学運動の継承という視点から見る事ができたであろう。<sup>(4)</sup>

## 2. 日本における社会史研究の文脈② ——柳田国男の歴史研究との関連——

### ①黒羽清隆による「柳田学」継承の提案

前節の目的は、国民的歴史学運動の「表層部分」の網野善彦とともに、その運動の「深層」に接していた、ランク・アンド・ファイルである黒羽清隆が、1970年代における日本の社会史研究の担い手であったことを確認し、国民的歴史学運動と社会史研究とのつながりを確認することにあつた。

ところで、網野の研究に対しては、日本史学研究の分野からは厳しい批判が提出された。その1つに永原慶二の批判がある。永原は『20世紀日本の歴史学』において、網野の中世民衆像を、柳田国男の「非政治的で、ある意味では平板化された民衆像」を継承したものと批判している。「農民闘争や支配—被支配にかかわる問題は柳田の民俗学から完全に切り捨てられている。」とし、そして「かつて明治国家の性急な上からの統合が伝統社会の破壊をもたらすことに対する怒りを民俗学として展開した柳田国男はその先駆者であり、今日の社会史研究は、それを継承しているともいえる。」と述べ、網野の近代批判は浪漫主義的歴史論として排斥される。柳田の学問との共通性から、網野の社会史研究が批判されている。

興味深いことに、本報告でとりあげる黒羽は、早い段階で歴史学にとっての「柳田学」の重要性を指摘した研究者でもあった。柳田国男が亡くなった翌年の1962年に、黒羽は柳田へのオマージュ、「柳田学の継承について—柳田国男先生の死をいたむ」を発表する。そこでは、「柳田学は本質的に日本民衆生活史に対するアポロギイの学問である」と位置づけられる。そして、前近代的婚姻制・家族制に対する川島武宜の発言（女性が、子どもをうむための手段、労働力を得るた

め的手段とされた云々）への柳田の反論（主婦の地位の高さなど）を取り上げて、次のように指摘する。

これらの発言を前近代維持説としかみられぬ者は柳田学に無縁であり、そのことにおいてその者の進歩主義は必ず呪われるであろう。先生のこれらの発言は、同時に民衆の不幸な状況をつくり出している政策乃至思考に対するはげしい攻撃と民衆の未来に対する憧憬的なヴィジョンとに分ちがたく連結している。（略）無告の民に代って、言葉のもっとも深い意味で日本民衆生活史に対するアポロギイを提出したのが柳田学であつて、柳田学なしに日本における社会科学の土着の問題は考えられず、従つて当然に、社会科教育が真に根生いの日本の社会科であるためには、柳田学の摂取・意味確認・体系化が必須の手つづきであらねばならぬことがここで理解されねばならぬ。（略）まったく差当つての話として、極めて採長補短的な形態でも柳田学の編入・くみ入れによる日本社会の歴史的発展の全体的イメージの「構造改革」を行う必要があると私は考えている。

「柳田学」を日本民衆生活史に関する最も重要な研究であるとし、「柳田学」の採取による日本歴史像の「構造改革」が必要、とまで述べている。そして、「田植え・屋根葺き・麦蒔き・味噌造り・髪結い・風呂の背中流しなどのすべての生活行為にみられる協力・共同努力のユイ（結）についての、たとえば『村のすがた』（一九四八年）におけるやさしい説明は、一揆・逃散などの一味同心行動について、その日常的基盤をはっきりと伝えぬだろうか。」と、「ユイ」についての説明に、その後の社会史研究で浮上することになる、<sup>マンタリテ</sup>「心性」の社会的基盤をみている。黒羽の研究において、「柳田学」が枢要な位置を占めることは明らかである。

網野も回想しているところであるが、国民的歴史学運動が展開していた1950年代前半は、歴史学と民俗学など、他の学問との交流が幅広く行われていた時期であつた。黒羽にもその影響があつたといえよう。しかし、国民的歴史学運動の終焉と歴史学研究の実証主義への転回の後、歴史学と他分野との研究交流は狭まっていた。黒羽の1972年の回顧によると、「柳田学」の継承という「私の提唱は孤立していた」という。しかしながら、黒羽清隆という歴史研究者・歴史教育者においては、「柳田学」、国民的歴史学運動、社会史研究は、一筋の糸としてあつたであろう。永原は、網野の社会史と柳

田の民俗学との共通性を問題としたが、改めて、社会史と柳田の学問との関連性が問題となる。

ところで、柳田の学問と社会史研究との関連を把握するのに有益な、1つの論争が、1950年代後半にあった。黒羽の指導教員であった家永三郎が、柳田国男の主張を在村地主イデオロギーと批判したのに対して、文芸評論家の花田清輝が、家永の立場を近代主義として反批判したものである。花田は、超近代的な芸術の創造を課題とし、その方法として前近代を否定的な媒介にして近代を乗り越えることを提起し、南方熊楠についても「東洋的なものと西洋的なものとの弁証法的な統一」を課題としたものとして着目していた。その花田は、家永の立場を近代主義であるとし、柳田の学問について、前近代を否定的な媒介として近代を超える試みとして、高く評価していた。とくに柳田の、活字文化以前のコミュニケーション（「口承文芸」）の重視の姿勢や、創造者としての大衆の主体性や、民間説話の自由区域・即興性への着目に注目していた。花田は柳田に「断固として活字文化を克服しなければならぬ」というかたい決意を読み取るのである。（花田「柳田国男について」）

この花田の柳田評価を媒介にすれば、「近代知そのものの再審」を志向する「新しい歴史学としての「社会史」と、柳田の学問との共通性が浮かび上がるように思われる。<sup>(5)</sup>

## ②柳田国男の歴史研究の方法

本項では、注(5)に記載した中井信彦の指摘をふまえつつ、「民俗学という個別学の創設にふみき」以前の、歴史学研究に対する柳田の批判と柳田自身の歴史研究の方法について見ていきたい。

柳田のアカデミズム史学に対する批判は厳しい。「過去三十年ばかりの間、自分は全然門外漢の立場から、日本の史学の成長を観察して居た」が、「是くらゐ又統一が無く、各人思ひ〜の研究を続けて居た学問も珍しいかと思ふ。其一つの大きいなる原因は、編年史が外形に於て順序だち、如何にも整うたる一つの組織の如くに、仮に人をして安心せしめたことでは無かるか。」「少なくとも現代の史学界は、今以て自由な題目の選り食ひである。此様に由緒あり古色ある学問であるに拘らず、棄てて何人も管理せざる空地が、広漠として現に草蕪に委ねられて居るのである。」「自分等所謂普通人は、新たなる生活の進路に行悩んで、歴史に聴くより他は無

い色々の疑問を有って居る。世の史学者の想像する以上に、多大の希望をこの学問の成長に繋げて居る。故に又失望する所も多いわけである。」このように、「新たなる生活の進路」のために解明が必要な領域が手つかずで残された状態であると、既存のアカデミズム史学を批判する。そして「広漠として現に草蕪に委ねられて居る」ところの日本人の生活史などは、「旧来の方法のみを踏襲して居ては、どうしても説明することが出来」ないことを指摘するのである。（柳田「聳入考」1929年）。

それでは、柳田身の歴史研究の方法はいかなるものか。「学問の正しい方法」を論じた「地方学の新方法」（1927年）から見ていく。柳田は個々の学問の進展を評価するとともに「百科の学は精透の域に達しても、全体の組織総合の学問というものが欠けている。」と、近代の学問の専門分化に対して、総合の必要性を指摘する。また、「眼前の生活上の疑問」に基づいて、その土地の住民自身が講究する地方研究が、欠くべからざる学問であるとする。そして従来の地方研究は、「文字のあるところでないと歴史はないかのように考えた」ため、「無理な骨折りばかりしていた」と、旧来の文書主義の方法を批判する。柳田は「素朴正直なる人の口は、よく金石の碑文の代りをするもの」であるとし、「何時からともなく口から耳へ、祖父母から孫曾孫へと語り伝えた歴史」を「口碑」と名付け、その活用を提唱する。今日ではオーラルヒストリーと称される方法である。

蘭信三「オーラルヒストリーの展開と課題—歴史学と社会学の狭間から」は、オーラルヒストリーの〈復権〉にとって、1970年代が画期であったとし、次のように記す。

六〇、七〇年代に欧米の歴史学に社会史が登場し、長らく歴史の主舞台にあったエリート男性だけでなく、労働者、女性、民族的マイノリティそして移民という、従来は陽が当てられなかった「普通のひとびと」(ordinary people)に歴史の関心が拡げられた。彼女ら彼らは往々にして文字を持たず、資料を残せなかった人びとであったために、その新たなフロンティアを切り拓く方法として、オーラルヒストリーに積極的、革新的な意味が付与されていった。

そして森は、英米におけるオーラルヒストリー復権以前の、日本における先駆的オーラルヒストリーの一つとして、「下からの歴史」に連なるいわゆる「常民」(民衆)の語りを研究す

る柳田民俗学」をあげている。

さて柳田は、口碑伝説は「じっさいかつてあった出来事を伝えるもの、あたかも日記や覚書などと同じものと見ることはむづかしい」が、「記憶以前の昔から、とにかく正直なる村の住人が、どういうわけかそんな話を歴史として信じていた。それにはわけがありまた各地何十ヶ所で同じことをいうのも、何か理由があるはずである。それを改めて考え」る必要を説く。「いかに今日の普通教育の智識に照してありうべからざることであろうとも、何か隠れたる理由がなければ、そういう伝説が発生するわけがない」のだと。先の森論文は、「言語論的転回」以後の、オーラルヒストリーにおける構築主義的な研究（文書至上主義・実証主義批判）の台頭について指摘しているが、上記の柳田の主張に、構築主義的側面を見いだすこともできよう。柳田の研究方法は、オーラルヒストリーをめぐる現在の研究方法論とも重なる、現代的なものといえる。

そこで最後に、言語論的転回後の歴史研究の動向と、柳田の学問との関わりについて、今少し言及しておきたい。

「言語論的転回」以後の歴史学における特徴として、一人ひとりの身体性（からだ）、感性や経験の重視がある。二宮宏之は『『からだ』の復権は歴史学にとって急務』（二宮「参照系としてのからだところ」）と述べていたが、山之内靖は理性と身体認識論上の関わりをつぎのように述べる。

かつて理性がしめていた社会科学上の特権的地位が失われてみると、身体的経験にもとづく認識に新たな意味が生じてくる。勿論、理性の不確実性にかわって身体が確実性の根拠となるのではない。だが、理性の不確実性が明らかになってみると、身体の不確実性はただちにマイナス要因だとはいえなくなり、少なくとも理性と等価なものへと浮上してくるであろう。我々は、不確実な理性、不確実な身体的感覚をもちいて複雑きわまりない暗黒の世界に何らかの意味空間をえがきだし、それを手掛かりとして行為実践へと乗り出してゆくのである。

（山之内「システム社会の現代的位相」）

身体性や感性の復権もまた、近代知から現代知への転位を示すものといえる。そして、柳田の『明治大正史 世相篇』は、そうした身体的経験にもとづく認識を重視した史書といえる。例えば、第1章の「眼に映ずる世相」では、「新色音論」と題して、主に日本人の色彩感覚と衣類調度との関係、前近代における色彩の制御と近代における解放などを論じ、また

「音」については、「音は欠くべからざる社会知識であった。」と指摘している。（なお身体性との関連でいうと、鹿野政直は、黒羽清隆の歴史研究においては食・病・死に関わる事柄が不可欠な要素として認識されていると指摘し、そこに柳田国男の影響をみている。）柳田のこの著書に強い影響を受けて、『昭和史 世相篇』をまとめた色川大吉はつぎのように記している。

柳田『世相篇』では、衣食住の形態の分類や変化を平板に追うというやり方などらず、むしろ衣食住に対する民衆の感覚の変化（情動）を重視し、それを内側からとらえることによって「民衆的近代」に向かう時代相を浮き上がらせるという方法を示している。住居を「板戸から紙窓へ」、さらに「ガラス窓」への発展でとらえ、それが家の内部を細かく仕切ることを可能にさせ、結果として家長権の支配から個の空間を分離独立させていった内側からの近代化過程を情動の視点から描いてみせた。その手法はフランスの『アナール』派社会史のそれに似て心憎いばかりで、柳田は住居の問題を「住心地」という切り口でとらえているのである（雑誌『アナール』の創刊は一九二九年、柳田の『世相篇』執筆は一九三〇年）。（色川『昭和史 世相篇』の構想）

アナール派と柳田『世相篇』の共通性と同時代性について指摘しているが、そのことの意味をどう考えるべきであろうか。前述の森論文が、日本の歴史学におけるオーラルヒストリー〈復権〉の「先駆的で本格的な仕事」の一つとする『日本ファシズムと民衆運動—長野県農村における歴史の実態を通して』（れんが書房新社、1979年）の著者である安田常雄の、1920年代についてのつぎの指摘は、その手がかりとなるだろう。

近年の一九二〇年代への関心は、一言でいって文化的人間の再発見といえます。欧米の二〇年代は十九世紀的世界像の自明性の崩壊のあとに、さまざまな文化領域で人間の多様な可能性が開花し、その一瞬の輝きののち、再びファシズムのなかにもみこまれていった時代でした。一定のきまった型と構成をもつ世界が、「周縁」からの「反乱」を受けて相対化にさらされました。（略）個人の内面の深層からの「理性的人間」への異議申し立てまでを含んでいました。（略）演劇・映画から、建築・デザイン・美術・音楽そして学問・思想の広い文化領

域において、新たな運動が芽ぶき、人々の心をとらえていきました。それはメイエルホリドの発想をかりれば、「肉体それ自体に内在している息づかいのようなもの」を復元し、そこから人間と社会を見直そうとしました。(安田「民衆思想の展開」)

安田は、日本の1920年代についても、例えば田中王堂の生活改善の主張(1920年)に、「生活をする生きたひとりの民衆という視点、しかもたえず内部の生命の力によって押しあげられ、社会の中にひとつの意味を創造していく人間というイメージ」を読み取り、それは同時代の多くの人々の「共通の感覚」であったとしている。柳田の方法についても、こうした1920年代の文化的文脈に位置づけることは可能であろう。そして1920年代のこうした動向もまた、近代知から現代知への転位として把握することができよう。<sup>(6)</sup>

## おわりに

本報告では、第1に、1950年代の国民的歴史学運動の指導部にいた網野善彦と対比して、そのランク・アンド・ファイルであった黒羽清隆をてがかりに、1970年代の社会史研究が国民的歴史学運動を継承している側面を指摘した。第2に、その黒羽が早い段階で柳田学の継承を指摘していた点を手がかりに、1920年代における柳田の歴史研究が1970年代の社会史研究や言語論的転回以後の歴史研究と共通する課題に取り組んでいたことを指摘した。そして第3に、1920年代の柳田の歴史研究、1950年代の国民的歴史学運動、1970年代の社会史研究は、近代知から現代知への転位を担う「20世紀人文学」の系譜にあり、そしてそれは21世紀における現代の歴史学の課題でもあることを提示した。

本報告は、「20世紀人文学の方法論的再検討」についての、粗雑で未熟な試論にすぎない。今後の共同研究会で、各分野からの積極的な発言をお願いしたい。

## 注

- (1) 本稿は、文明研究所コアプロジェクト「20世紀人文学の方法論的再検討」の第1回研究会(2016年9月1日)での報告内容に手を加えたものである。当日のタイトルは、「20世紀人文学の方法論的再検討—日本史学の分野から郷土史研究、国民的歴史学運動、社会史研究を題材に—」であった。
- (2) 二宮のこの発言は、1999年度歴史学研究会大会全体会「再考：方法としての戦後歴史学—世界史における20世

紀IV」のシンポジウムでのものである。同シンポジウムの企画・運営の責任者であった安田常雄は、自身が提案した全体会テーマの1つが「方法としての二〇世紀」であり、「ここで方法とは、私にとっては歴史分析のための理論・視座・視点にとどまらず、文体・まなざし・身体的反射などを含む生き方の構えのようなものとして焦点を結んでいる。」「私のなかにあったのは、いわば一九世紀的認識とは異なる二〇世紀的認識の歴史学への浸透という問題であった。」(安田「方法についての断章—序にかえて—」)

- (3) 石母田は「歴史科学と唯物論」(1956年)で、1950年代の日本の情勢についての判断の誤りは、科学的能力の未熟さに由来するとし、「われわれの主観から独立した客観的な世界を承認し、人間の意思その他に左右されない法則を探求すること」が科学の任務であるとする。翻って自己の著書や、国民的歴史学運動の観念主義、精神主義について、実存主義、小ブルジョアの傾向、三木哲学の影響によるものと自己批判する。そして実証主義が歴史学における唯物論であり、客観主義であるとし(ただし不徹底な唯物論と表現し、マルクス主義者は徹底的な唯物論に完成させる必要があるとする)、「歴史学者の協力と団結」という視点から、かつて厳しく批判していた実証主義歴史学との提携を主張した。

国民的歴史学運動に携わった日本中世史家の黒田俊雄は、1978年時点で、歴史理論の閉塞状況を指摘し、石母田「歴史科学と唯物論」が、歴史学の「体制の根拠」となると指摘している。「事実として存在したマルクス主義史学と「実証主義史学」との共存という戦後歴史学の大勢を規定するとともに、もう一つにはそのようないわば体制を根拠づけている」。石母田のこの論文以後、「実にこの二つの立場こそがあやまらずに拒絶反応、の磐となり、そしていまでは歴史理論における不生産構造を代表する標準的な二つの立場となっているのです。」(「歴史科学運動における進歩の立場」『歴史評論』1978年2月)

人文学の方法論的再検討を試みる本報告では、石母田の自己批判の理論的基礎が、レーニンの『唯物論と経験批判論』にあったことを確認しておきたい。レーニンのこの著書は、認識の主観性を指摘したマッハ主義を批判し、人間の頭脳が自然や社会の現象を客観的に真実に反映し得るという主張を展開したものである。しかし、マッハ主義からパラダイム論が派生し、またフッサールの「現象学」、ソシュールの言語論、フロイトの心理学などの現代思想との共通性をもっていることを考えれば、レーニンのマッハ主義批判は、19世紀的な認識論(反映論、科学主義)への回帰という側面をもつ。

石母田の研究に即していえば、戦後歴史学の名著とされる石母田の『中世的世界の形成』(戦時下に執筆され、戦後に刊行)は、歴史における「構造と主体」を扱ったもので、その「政治的、倫理的頹廃」により「政治的主体」たりえなかった「黒田の悪党」についての歴史叙述である(喜安明の指摘)。そこには、自然科学と人文学との違いや人文学の自律性を指摘し、科学主義を批判した新カント派の影響や、階級闘争や下部構造では解消できない独自の領域の存在の指摘して創造的マルクス主義をめざした三木清の影響を、認めることができる。石母田の

研究には、現代思想の文脈があった。そうした系譜をふまえると、石母田の自己批判は、20世紀的な認識論から19世紀的な科学主義的認識論への逆行であり、現代歴史学への展開を封印し、方法論的な停滞を招くものであったと考える。

- (4) 国民的歴史学運動と社会史研究との連関を体現している研究者の一人として、二村一夫がいる。二村は、イギリス社会史研究の古典『イングランド労働者階級の形成』（前掲の長谷川著書には、同書は「カルチュラル・スタディーズの古典」で、「文化論的転回」への志向性が内包されていたとある）の著者E・P・トムスンとほぼ同時に、日本で社会史的な立場から労働史に取り組んだ研究者である（主著『足尾暴動の史的分析 鉱山労働者の社会史』東京大学出版会、1988年）。

二村は黒羽と同じく1934年生まれで、1952年に東京大学に入学した。同年3月に出版された石母田の『歴史と民族の発見』の「そこに収められた一編一編に深い感銘を受け、進学のコースを決めるとき迷わず国史学科にした」。大学時代は歌声運動に「深入りしていた」ため、「国民的歴史学の運動に加わった経験はない」が、大学卒業後に、「法政の大学院を選んだのは、(中略)政治学専攻の修士課程が新設され、そこで石母田先生が教えられることを知ったからである。『歴史と民族の発見』で道を誤ったので、その貸しを取り立てに来ました」と初対面のあいさつで言い、先生を苦笑させた。」という。修士論文の提出後に、石母田から助手試験を受けるように勧められ、法政大学の助手に採用された(二村「石母田正先生」)。

石母田の指導を受けて作成した修士論文が後の『足尾暴動の史的分析』のもととなる「足尾暴動の基礎過程—「出稼ぎ型」論に関する一批判」(『法学志林』57-1, 1959年)である。1950年代において日本労働問題研究に大きな影響力をもっていた大河内一男の「出稼ぎ型」論を批判したものであり、ある研究者は「この気鋭の歴史家によって解明された史実は、戦後日本の「労働問題」研究の方法を根底からゆるがすに足りるものであった。」と評している(中西洋『増補 日本における「社会政策」・「労働問題」研究 資本主義国家と労資関係』東京大学出版会、1982年)。

二村はその後、〈覆刻シリーズ 日本社会運動史料〉200冊をはじめとする、法政大学大原社会問題研究所の所蔵資料の整理紹介に多くの時間を費やすことになり、足尾暴動の研究は中断するが、1971年に、日本の労働運動に関する歴史研究を総括する論文を執筆し、つぎのように労働争議研究の重要性を指摘した。「一般に労働争議研究においては、労働組合の日常活動の記録からは容易にうかがえないさまざまな矛盾が顕在化するのであり、争議を研究することによって組合の日常活動も動態的に分析することができるのである。とりわけ、文書による記録を残すことがまねな活動家や一般組合員、あるいは組合にも参加しない労働者の意識、思想をさぐる手だてとしては、彼等の行動そのものを手がかりにする他はない。」(二村「労働運動史(戦前期)」)この提唱は、労働運動史研究に大きな影響を与え、以後、労働争議史研究が労働運動史研究の主潮流となる。二村は前掲著書

で、自身のこの指摘を振り返り、「この提唱は、最近の社会史ブームのなかで注目されている〈マンタリテ〉(心性)の重要性とその把握の具体的方法を提示していたもので、西欧での労働史や社会史の研究動向といささか共通する問題を、ほぼ同時に意識していたと言えるのではないか。」と、西欧の労働史、社会史研究との同時代性について記している。

- (5) 柳田の学問の特徴を、歴史学という側面から指摘したものに、中井信彦「柳田国男の歴史学—一回性のない歴史への挑戦—」(1973年)がある。中井は、柳田が歴史学にもとめたものは「事件の年代記にかけにかくされつづけてきた、この常民の一回性のない歴史」であるとし、「柳田史学」を「一回性のない歴史という、日本史の未墾の荒野に挑戦した歴史学」として把握する。柳田の歴史像は平板化されがちであるが、柳田が対象としたものは「くり返されるものの変化」であることを指摘する。「くり返されるものがくり返されなくなり、新しいくり返しへ移り変るところに歴史があるということ」。そして「くり返される生活の日常性の変化に歴史の主題をすえるとき、歴史の主体はそれら生活の日常性の担い手に求められなければならない。」そこから「人格をも人情をも無視」され続けてきた「平民」である「常民」という概念が導きだされるとし、柳田による「常民の歴史は、(1)自然のなかでそれに働きかける生産的労働の編成を基礎とし、(2)その上に営まれる衣食住・婚姻・教育・趣味などのケとハレの循環としての生活、(3)そしてそれらの営為がめざしていた生きがい、という三つの次元に属する諸部面を含むと考えられる。それらの諸部面を総合するものは「政治という漠然たる語で暗示されて居る」ものとみなされる。」としている。中井の指摘をふまえると、少なくとも1920年代の柳田国男に関しては、永原慶二の「非政治的で、ある意味では平板化された民衆像」という批判は再考の必要がある。

中井は、雑誌『思想』における社会史の特集において、「史学としての社会史—社会史にかんする覚書—」(1979)を執筆し、マルク・ブロックやリュシアン・フェーブルが掲げた「生きた歴史学」の「試みの核心は、歴史を事件史から解放すること、歴史学を人文・社会諸科学と同じレベルに引き上げて相互の交流をはかることとの二点にあったと思われる。」とし、「事件史からの歴史の解放」の主張は、「わが国にも柳田国男という先覚」があったとする。「しかし、一回性のない民衆の日常性の歴史をとる柳田の主張は、歴史学者の容れるところとならなかった。硬軟、手をかえ品をかえて行なった史学界への働きかけを空しく断念したとき、彼は多年ためらいつづけていた民俗学という個別学の創設にふみきったのであった。文献史学と民俗学とが分業的に協業する形が彼の見出した妥協点であったが、いったん妥協したところから、彼の学問は微妙に転回しはじめる。単純化していえば、歴史学から文化論への転回である。」「歴史学と社会学・文化人類学との二つの道の問題は、けっして柳田個人にかかわるだけのものではない。アナール派の歩みと現状にも同じ問題が大きく横たわっているのである。」と述べている。社会史と柳田の学問について、初発における問題関心の共通性ととともに、その後の「文化論への転

回」という共通の問題性を指摘している。

- (6) 中村政則は「言語論的転回以後の歴史学」(『歴史学研究』2003年9月)で、歴史構成主義(歴史構築主義)についてとりあげ、「この問題も歴史哲学者や歴史家が長い間、議論してきたテーマである。新カント派や三木清の歴史哲学を読めば、歴史構築主義者の言っているようなことは、80年以上前からわが国で議論されていたことがわかる。」と述べているが、問題は80年以上前から同様の問題が議論されていたことの意味であろう。本報告は、近代知から現代知への転位が20世紀人文学の特徴であり、1920年代における知の課題と現代における知の課題は共通性があるという認識に立っている。また、前述の1999年度歴史学研究会大会全体会で安田常雄の指導教員であった石井寛治は、1970年前後の大学紛争がもたらした文化的イデオロギー的影響の大きさを指摘し、自身の身近な経験に即して、「一九七五年刊行の筆者も参加した大石嘉一郎編『日本産業革命の研究』上・下(東京大学出版会)と、一九七九年刊行の安田常雄『日本ファシズムと民衆運動』(れんが書房新社)および同年度の歴史学研究会大会での武田晴人報告「日本帝国主義の経済構造」(『歴史学研究』別冊特集)との間に、戦後歴史学と現代歴史学との切れ目があるように思われる。」としているが、本報告では安田の研究を、より長期的な視点、1920年の文化状況との連続性で、つまり近代知から現代知への転位を担った「20世紀人文学」の系譜として考えている。

#### 【主な参考文献】

- 網野善彦「人類史的転換期における歴史学と日本」(小熊英治との2002年の対談。『対話の回路 小熊英二対談集』新曜社、2005年、所収)
- 網野善彦『中世東寺と東寺領荘園』東京大学出版会、1978年
- 石母田正「歴史科学と唯物論」(『講座 歴史』第1巻、大月書店、1956年。『石母田正著作集』第13巻、岩波書店、1989年、所収)
- 色川大吉「『昭和史 世相篇』の構想」(『日本民俗文化大系12 現代の民俗』小学館、1985年。『色川大吉著作集』第3巻、筑摩書房、1996年、所収)
- 鹿野政直「『民衆』史と『庶民』史を架橋する—黒羽清隆氏のまなざし—」『歴史評論』457号、1988年5月
- 喜安朗「網野善彦における絶対自由の精神 境界領域を踏破する歴史学」(安丸良夫・喜安朗編『戦後知の可能性 歴史・宗教・民衆』山川出版社、2010年、所収。後、喜安朗『転成する歴史家たちの軌跡』せりか書房、2014年、所収)
- 黒田俊雄「歴史科学運動における進歩の立場」『歴史評論』334号、1978年2月
- 黒羽清隆「柳田学の継承について—柳田国男先生の死をいたむ」(『歴史地理教育』81号、1962年。同『日本史教育の理論と方法』地歴社、1972年、所収)
- 黒羽清隆『十五年戦争史序説』三省堂、1979年
- 黒羽清隆「日記・伝記から読む日本近代史」(1981年の講演。『歴史を楽しむこと、歴史に参加すること 黒羽清隆日本史研究入門』明石書店、2005年、所収)
- 中井信彦「柳田国男の歴史学—一回性のない歴史への挑戦—」(同『歴史学的方法の基準』塙書房、1973年、所収)

- 中井信彦「史学としての社会史—社会史にかんする覚書—」『思想』663号、1979年9月)
- 永原慶二『20世紀日本の歴史学』吉川弘文館、2003年
- 二宮宏之「戦後歴史学と社会史」(『歴史学研究』1999年10月増刊号。歴史学研究会編『戦後歴史学再考「国民史」を超えて』〈青木書店、2000年〉、並びに『二宮宏之著作集』4、岩波書店、2011年、所収)
- 二宮宏之「参照系としてのからだどころ—歴史人類学試論—」(『社会史研究』8、1988年3月。二宮『歴史学再考』日本エディタースクール、1994年、並びに『二宮宏之著作集』3、岩波書店、2011年、所収)
- 二村一夫「労働運動史(戦前期)」(労働問題文献研究会編『文献研究・日本の労働問題 増補版』総合労働研究所、1971年)
- 二村一夫『足尾暴動の史的分析—鉱山労働者の社会史』東京大学出版会、1988年
- 二村一夫「石母田正先生」『法政』1986年4月号。「石母田正先生のこと」と改題して、二村一夫オンライン著作集(<http://nimura-laborhistory.jp>)第13巻に収録。
- 長谷川貴彦『現代歴史学への展望 言語論的転回を超えて』岩波書店、2016年
- 花田清輝「柳田国男について」(初出は『近代の超克』1959年。『花田清輝評論集』岩波文庫、1993年、所収)
- 蘭信三「オーラルヒストリーの展開と課題—歴史学と社会学の狭間から」(『岩波講座 日本歴史』第21巻、2015年)
- 安田常雄「民衆思想の展開」(『社会思想史研究』9号、1985年。同『暮らしの社会思想 その光と影』勁草書房、1987年、所収)
- 安田常雄「方法についての断章—序にかえて—」(歴史学研究会編『戦後歴史学再考「国民史」を超えて』青木書店、2000年、所収)
- 柳田国男「地方学の新方法」(1927年、岩波文庫『青年と学問』所収)
- 柳田国男「智入考」(1929年。『定本柳田國男集』第15巻、「婚姻の話」、所収)
- 山之内靖「システム社会の現代的位相—アイデンティティーの不確実性を中心に—」上・下(『思想』第804・5号、1991年)